第1章

育ての母（アルマ・マーテル）の広い膝に抱かれてアメリカ人は生まれた

――クレヴクールが描いた先駆的〈メルティングポット〉

ヨーロッパからの移民たちは、アメリカという偉大な育ての母（アルマ・マーテル）の広い膝に抱かれることで、アメリカ人という「新しい人種」として生まれ変わる。クレヴクール

ではアメリカ人、この新しい人間は、何者だろうか。クレヴクール

はじめに

英領北米植民地時代のアメリカがすでに多人種・多民族からなる〈メルティングポット〉の状態にあったことを示す際に引用されるのがクレヴクールの『アメリカ農夫の手紙』（以下『手紙』）である[1]。アメリカ文明論の古典に数えられるこの書は、一七八二年にロンドンでまず出版され評判になったものの、アメリカ版はその一一年後の一七九三年になってようやくフィラデルフィアで出版されている。驚くべきことに、その後もこの書は一九〇四年にいたるまで再版されることはなかった。ここからわかるように、アメリカではその価値は長いあいだ認められることがなかった。ところが、アメリカで多文化主義論争が激しくなった一九九〇年代初頭から、このアメリカ文明論の古典が引用される頻度が一段と高まる。そしてそのほとんどの場合、いわゆる〈メルティングポット〉の先駆として、多文化主義に反対する立場の論者たちが『手紙』のなかからクレヴクールの言葉を引用しているのである。

クレヴクールはこの『手紙』のなかで、旧世界のヨーロッパ人とその子孫は、アメリカの偉大な大地の広い膝に抱かれることによって新しい人間として生まれ変わりアメリカ人になるといっている。ここから、クレヴクールはアメリカの大地を擬人化してアルマ・マーテル（ラテン語で「育ての母」を意味する）と名づけていることがわかる。ここには、ヨーロッパからアメリカに移住してきた人びとが、アメリカで自由土地保有者（フリーホールダー）になり、自分の土地を耕すことで心身ともに健やかになり、旧世界での偏見や風習を捨てて、アメリカという偉大な〈るつぼ〉のなかで人種的にも融合して、新しい考え方や生活様式を身につけるようになるという手放しのアメリカ賛歌が見られる。しかしながら、クレヴクールが描き出した楽天的で牧歌的なアメリカ像は、植民地時代のアメリカ社会の実態を正しく反映していない「神話」であるとして、後年のアメリカ移民史研究者によって批判されることになる。

本章のねらいは、クレヴクールの『手紙』に焦点を当て読みとくことで、彼が「アメリカ人とは何か」、また「ヨーロッパからの移民はいかにしてアメリカ人になったか」についてどのように考えていたかを明らかにすることにある。

1　クレヴクールの生涯

家庭環境と教育

本節では、この『手紙』の著者クレヴクールとはいかなる人物であったのか、彼の数奇な生涯を次にたどってみることにしたい[2]。クレヴクールは、一七三五年、フランス・ノルマンディー地方の都

市カーンに生まれている。彼のフルネームはミシェル・ギョーム・ジャン・ド・クレヴクールであるが、アメリカへ渡ってからはフランス国籍を捨て、名前もジェームズ・ヘクター・セント・ジョンとイギリス風に変えている。父親は地元の小貴族、母親は裕福な銀行家の娘で、当時の女性としては高い教養を身につけていたと思われる。両親はともにカトリック教徒で、きわめて厳格な人であったようだ。厳格で性格の激しい家父長的な父親の監督下で育った少年クレヴクールは、カーンにあるイエズス会派の学校でラテン語、フランス語、修辞学、数学、神学（教理問答）などの古典的教科を中心に学ぶかたわら、測量術や地図作成法などの実務的な教科も修めている。後年、彼はカナダのフランス植民地であったヌーベル・フランスに渡り現地の軍隊に入るが、そこではカーンの学校で学んだ測量術や地図作成法が役立つことになる。

少年時代のクレヴクールは、イエズス会派の学校で教育を受けているが、生徒としてのクレヴクールはあらゆる点で申し分のない優等生であった。しかしながら、この学校が彼に与えた宗教的な感化という面では、ほとんど無に等しかったといわざるをえない。というのも、彼は一七五〇年に学校を卒業しているが、その後の彼の生き方を見ると、彼が名ばかりのカトリック教徒であったことが窺えるからである。当時のフランスは啓蒙主義が隆盛期を迎えており、少年クレヴクールはその思想に大きく感化され、キリスト教をたんなる迷信に過ぎないと見ていたようだし、カトリック教会の不寛容さに対しては、機会があるごとに厳しく批判していたのである。

イングランドのソールズベリーへ

一七五四年、両親はクレヴクールをイングランドのソールズベリーにあった親戚の家に送り出している。当時のヨーロッパの貴族の子息は、成人になれば軍役につき将校の道を歩むのが慣例であった。実際、クレヴクールの弟は軍人の道を選んでいる。このことを考えると、両親が自分たちの息子、しかも長男を外国に送り出したというのは、当時としてはかなり異例なことであったと思われる。その理由が何であったのか、またクレヴクールがソールズベリーで何をしていたのか、その詳細については記録が残っていないため不明である。英語の本場で英語力に磨きをかけるというねらいもあっただろうが、クレヴクールは厳格な父親とそりが合わず、しばしば衝突していたことがわかっている。これはあくまで推測の域を出ないが、父親は長男のクレヴクールに軍人の道を選ぶように勧めたが、クレヴクールがそれを拒んだことが父子間の不和を生んだ原因の一つだったのではないだろうか。

クレヴクールはソールズベリー到着早々、地元の商人の一人娘であった英国人女性と恋に陥り婚約までしたが、結婚式を目前にその女性が突然亡くなるという不幸に見舞われる。おそらくこれが原因で、彼は両親の待つフランスには帰らず、傷心を抱いてカナダに渡る決意をしたものと思われる。いずれにせよ、彼はイングランドで少なくとも二年間を過ごしており、したがってそのあいだに彼の英語力はかなりのレベルに達したものと推測される。

カナダのフランス植民地へ

一七五五年、二〇歳になったクレヴクールはカナダのフランス植民地ヌーベル・フランスに渡っている。こうして彼は生涯にわたる根無し草の放浪生活に入ったのである。当時カナダはフレンチ・アンド・インディアン戦争（北米植民地をめぐる先住民を巻き込んでの英仏の争い）の最中にあった。クレヴク

ールはカナダでは測量技師などをしながら五大湖地方を旅行していたが、一七五七年にフランス植民地の義勇軍に入隊し、翌年にはフランス正規軍に少尉として任官、本格的な軍人としてのキャリアを積むことになる。一七五九年、クレヴクールはアブラハム高原におけるイギリス軍との激戦に加わった。フランス軍側の負け戦に終わったこの戦いで、英仏双方の将軍は致命傷を負い死亡し、クレヴクール自身も負傷して入院している。このような活躍にもかかわらず、この戦闘終了後、何らかの原因で彼は同僚の将校たちと不仲になり、連隊から追放されている。このあたりの経緯については、フランス軍側の記録もなく、クレヴクール自身もまったく言及していないため、彼が除隊された理由は現在も不明なままである。

英領北アメリカ植民地で農夫となる

この後まもなく、クレヴクールはカナダのフランス植民地を去り、アメリカのイギリス植民地に向かう決断をしたが、その理由についてクレヴクール自身は明らかにしていない。一七五九年一二月一六日、彼はイギリス軍の輸送船でニューヨークに到着する。その後、測量技師としてペンシルヴェニアとニューヨークを歩き回ったのち、一七六五年にニューヨークの市民権を取得している。先述したように、フランス国籍を捨てアメリカ人になったクレヴクールは、名をイギリス風にジェームズ・ヘクター・セント・ジョンと改名する。アメリカ市民権を取得した四年後の一七六九年、クレヴクールはニューヨーク植民地の有力者の娘でプロテスタント教徒のメヒタブル・ティペットと結婚する。新婚のクレヴクール夫妻は、ニューヨーク西部のオレンジ郡に広大な農場――それはクレヴクールによってパイン・ヒルと名づけられる――を購入してそこに新居を建てて住みついている。

こうして自由土地保有者（フリーホールダー）となったクレヴクールは、その後の七年間、この農場の経営に専念するかたわら、三人の子ども（一女二男）をもうけている。当時母国フランスで有力な思想であった重農主義からの影響を強く受けていたクレヴクールは、農耕こそがもっとも人間に安定した健全な生活を保証するものと信じて疑わなかった。彼のこのような信念は、植民地の内陸の開拓地に住む人びとの性格について描写した「手紙Ⅲ　アメリカ人とは何か」に端的に表れている。

> 素朴な土地耕作の作業は、この人たちを純粋にしますが、政府の寛容、宗教の穏やかな戒律、独立心に富む自由土地保有者（フリーホールダー）の地位はきっと、ヨーロッパの同じ階級の人たちにはほとんど見られない感情を起こさせるにちがいありません。なんといったらよいのでしょうか。ヨーロッパにはこのような階級の人はいないのです。早くからものを覚え、早くから商取引をおこなうので、じつに機敏にはなります。自由民として訴訟好きにもなるでしょう。（中略）勤勉、立派な暮らし、利己心、訴訟好き、地方政治、自由民の誇り、宗教上の無関心が彼らの特質です[3]。
>
> 生活様式が洗練されなくとも、土地を耕していれば、少なくとも素朴で穏やかな人間になります。それで、必要なものはなにもかも満たされます。私たちの時間は労働と休息に分けられ、ひどい悪行を働く暇などありません。猟師の場合、その時間は狩猟という労働か、休息という怠惰か、酩酊という放縦かです。狩猟は放縦で怠惰な生活にすぎず、必ずしも良い性格を歪めるとはかぎりませんが、不運と結びつくと、貧困につながります。貧乏な人間はごく当然なことですが、貧困は強欲と不正への傾向を助長するもので、これが決定的な段階です[4]。

独立革命派のスパイと疑われ逮捕される

しかし、クレヴクールのこのような七年間におよぶアメリカ農夫としての平和で安定した生活も長くは続かず、終りを告げることになる。一七七六年に独立戦争が勃発したため、クレヴクールは戦火を逃れて、一七七九年、長男以外の家族を残したままニューヨーク市へ脱出し、ヨーロッパに渡る機会を待った。ところが当時のニューヨーク市は英国王派（ロイヤリスト）――アメリカ独立戦争で革命側（アメリカ合衆国）に反してグレートブリテン王国を支持した植民地の住人――が支配しており、クレヴクールは独立革命派のスパイと疑われて逮捕され、長男ともはぐれて三カ月を牢獄で過ごすことになる。しかし、ニューヨーク市の有力な友人が保証人となってくれたことでようやく釈放され、長男とともにイギリスに脱出することに成功する。

ここで、クレヴクールが独立革命派のスパイと疑われた理由について考えてみたい。彼は妻の実家との関連で英国王支持の裕福で保守的な知人が多く、先述したように、青年時代にカナダのフランス植民地でイギリス軍とのアブラハム高原の激闘で負傷した経験から、戦争の恐ろしさ、悲惨さ、無意味さを知り尽くしていただけに、革命騒ぎにはできるだけ巻き込まれたくないという気持ちが強かったと思われる。その反面、独立革命派の立場も理解できなかったわけでもなかった。旧世界、すなわちヨーロッパ社会の思想と生活様式を否定するところにこそ、新世界、すなわちアメリカが成立するというのが、彼の年来の主張であったからである。その結果、英国王支持派と独立革命派の対立の渦中にあって、どちらにも与することができず、去就に迷っているうちに、双方の陣営から疑いの目で見られることになったのである。

アメリカ独立革命前までのクレヴクールは、パイン・ヒルでの自由土地保有者（フリーホールダー）としての幸福な家庭生活を楽しんでいたが、独立革命の勃発によってその生活は破壊され、土地（農場）と家屋を失い、独立革命派のスパイと疑われて牢獄に入れられ、家族とも離れ離れになるという悲劇に見舞われた。このときの彼の内心の怒りと嘆きの声は「手紙十二　辺境開拓者の悲哀」のいたるところに満ち溢れている。

故国フランス帰国後の生活とその晩年

クレヴクールがイギリスから郷里フランスへ帰国し、両親と再会することができたのは一七八一年八月であった。翌年ロンドンで『手紙』の初版が出版されて好評を博したことで、クレヴクールのその後の人生はふたたび新たな展開を見せることになる。そのあいだアメリカではパイン・ヒルの農場は先住民（インディアン）の襲撃を受けて、家屋敷は消失し、妻は死亡し、二人の子どもは隣人に助け出されボストンのある家庭に引き取られていた。このような事情を知るべくもないクレヴクールは、パリ社交界の中心的存在であったドゥドトー伯爵夫人を取り巻く知識人たちと交流するようになり、その一員であった駐仏アメリカ大使ベンジャミン・フランクリンの知遇を得たのである。

彼は一七八三年、ニュージャージー州のフランス領事として再度アメリカへ渡ることになるが、その際アメリカに残していった二人の子どもの居場所を尋ねあて、二人を引き取っている。ところが、彼がアメリカでフランス領事としての任務を果たしているあいだに、一七八九年、フランス革命が勃発したため、一七九〇年に故国にもどり領事を辞任している。さらに、一七九三年に恐怖政治がはじまり、身の危険を感じた長男と次男はそれぞれドイツとアメリカに避難する。クレヴクール自身は、友人

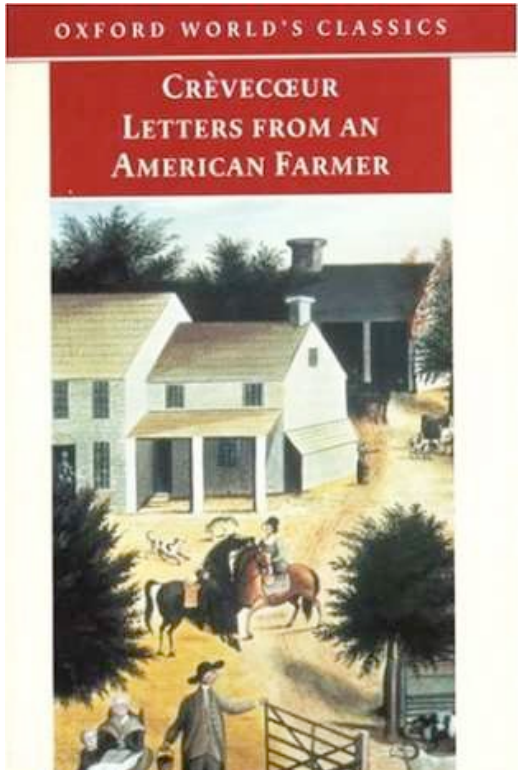
たち（とりわけ貴族の身分にあった者たち）の多くが断頭台の露と消えてゆくなかを、パリの仮寓に身をひそめて渡米の機会を窺ったが、その機会がめぐってくることはついになかった。彼は一七九五年、ハンブルグに避難していた長男を訪れている。しかし、翌年またフランスにもどり、ノルマンディーの父親の屋敷で――父親は一七九八年に死亡している――四年ほど比較的平穏無事な生活を送っている。晩年は、パリの郊外に買い求めた田舎屋敷で生涯の最後の四年間を静かに送っていたが、一八一三年、心臓発作で七八年の波乱に富んだ生涯を閉じている。

2　手紙Ⅲ　アメリカ人とは何者か

手紙Ⅲ　アメリカ人とは何者か

クレヴクールが住みついたニューヨーク西部のパイン・ヒルの農場でのおよそ十年におよぶアメリカ農夫としての暮らしが、波乱に富んだ彼の人生でおそらく最も平和で安定した時期であったと思われる。アメリカでの彼自身の生活体験をもとに書簡形式で綴ったのが『手紙』であり、それは一七八二年にロンドンで出版されたが、その大半は一七七六年の独立革命以前に執筆されている。この『手紙』はアメリカの農夫が教養ある英国人の質問に答えるという体裁をとっており、ヨーロッパの人びとに新大陸アメリカの生活の特質を紹介するという内容になっている。メルティングポット論の先駆として研究者によって頻繁に言及されるこのクレヴクールの『手紙』は、引用される頻度において、アレクシス・ド・トクビルの『アメリカにおけるデモクラシー』と双璧をなすといわれるが、その『手紙』のなかでも、とりわけ頻繁に引用される「手紙Ⅲ　アメリカ人とは何者か」に綴られたその最も有名な文章の一節を、やや長くなるが次に引いてみよう。

ではアメリカ人、この新しい人間は、何者でしょうか。彼はヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。したがって彼は、ほかのどの国でもついぞお目にかかれない不思議な混血です。私はこんな家族を知っていますが、祖父はイギリス人で、その妻はオランダ人、息子はフランス人の女性と結婚し、そのあいだに生まれた四人の息子たちは、今では四人とも国籍のちがう妻を娶っています。偏見も生活様式も、昔のものはすべて放棄し、新しいものは、自分の受け入れてきた新しい生活様式、自分の従う新しい政府、自分のもっている新しい地位などから受け取ってゆく、そういう人がアメリカ人なのです。彼は、わが偉大なる育ての母(アルマ・マーテル)の広い膝に抱かれることによってアメリカ人となるのです。ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日かこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう。アメリカ人は、遠い昔に東方で始まったじつに多くの芸術、学問、活力、勤勉を持ち運んでくる西方の巡礼者です。彼らはやがて偉大な円環を完



成するでしょう。アメリカ人はかつて、ヨーロッパ全土に散在していました。彼らはここで合流して、もっとも素晴らしい人間集団の一つとなっているのですが、このような集団はかつてあったためしはなく、これからも、彼らの住む異質の風土の力によって独自なものになってゆくでしょう。したがって、アメリカ人が、自分もしくは祖先たちの生まれた国よりもいっそうこの国を愛するのは当然のことなのです。ここでは、勤勉の報酬は、仕事の進み具合と同じ歩調で増えてゆきます。彼の労働は自然の根本原理である利己心に基づいています。これより強い誘因が必要でしょうか。かつては一切れのパンをねだって得られなかった妻や子どもたちも、今や、肥えて陽気になり、豊穣な収穫によって自分たちみんなの食糧と衣類をもたらしてくれるはずの畑を、父を助けて喜んで耕しておりますが、その収穫は一部たりとも、専制君主や裕福な僧院長や強大な領主に取り上げられることはありません。つまり、牧師に対するわずかばかりの寄金と、神への感謝の気持ちだけは求められます。誰がこれを拒否できましょうか。アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です。したがって、アメリカ人は新しい思想を抱き、新しい意見を持たなければなりません。不本意な怠惰、奴隷的屈従、貧困、無益な労働から、豊かな生計を報酬として与えてくれるまったく異なった性質の労働へと移ったのです。これがアメリカ人です[5]。

わたしたちはここに、「専制君主や裕福な僧院長や強大な領主」の支配する旧世界のヨーロッパから来た移民が、アメリカという新世界の開拓地で自由地を手に入れ自由土地保有者（フリーホールダー）になり、豊かな大地に抱かれることで、人種的にも融合し、また生活様式や思考様式など文化の面でも新しくなるとするクレヴクールの楽観的で明るい「アメリカ賛歌」を読み取ることができる。要するに、これら楽観論の根底あるのはヨーロッパの封建制度の全面的な否定である。

3　クレヴクールの「アメリカ賛歌」

育ての母としてのアメリカの大地

右に引用した「手紙Ⅲ　アメリカ人とは何か」の一節を読む限り、わたしたちはそこにクレヴクールのアメリカに対する手放しともいえる全面的な賛美が描かれているのを読み取れる。ここでの彼の主張は、次の六点に要約できるだろう。

第一に、アメリカ人はヨーロッパ人でもその子孫でもなく、ほかのどの国でもついぞお目にかかれない「不思議な混血」として想定されている。すなわち、「ヨーロッパからの移民たちは、アメリカという偉大な育ての母（アルマ・マーテル）の広い膝に抱かれることで、アメリカ人という一つの新しい人種として生まれ変わる」というのがクレヴクールの第一のメッセージなのである。

図４を参照されたい。これは一七八七年に出版されたクレヴクール著『アメリカ農夫の手紙』（フランス語版第一巻）に掲載された挿絵である。画面右側の背景には、湾に係留中の帆船の船首部分が見える。帽子をかぶった上着とズボンの五人の男たち（移民と思われる）が手漕ぎのボートでいままさに上陸しようとしているところである。そのほかに先に上陸したと思われる五人の移民の男たちが新しい土地で輪になって踊っているのが画面のちょうど中央に見える。画面の前面には十一人の裸の小児たちがおり、そのうち七人は大地からとれた作物（おそらくトウモロコシとジャガイモであろう）で遊んでいる。画面左下には、木陰に座っている女神に四人の小児がつかまっている。二人の赤ん坊が女神の裸の胸からおっぱいを飲んでいる。ほかの二人の赤ん坊は女神の両肩に寄りかかっている。女神は羽毛の飾りがついた帽子をかぶっており、羽毛でできたスカートをはいている。彼女のはだしの脚の下には、盾、弓、そして何本かの矢が地面に置かれている。遠景には二軒の家が描かれており、この土地にはすでにヨーロッパ人の末裔が住みついていることがわかる。

ここにはすでにアメリカを〈メルティングポット〉と見なす発想が現れており、この意味でクレヴクールの『アメリカ農夫の手紙』はメルティングポット論の先駆ということができるだろう。ただし、クレヴクール自身は〈メルティングポット〉というメタファーは使っていないことに留意したい。錬金術からとられたメタファーではなく、育ての母を意味するラテン語「アルマ・マーテル（Alma Mater）」が使われている。すなわち、クレヴクールはアメリカの自然を「母なる大地」（女神）にたとえ、この大地に抱かれて旧世界の人間は新しい人種、すなわちアメリカ人に生まれ変わるといっているのだ。

第二に、「手紙Ⅲ」には専制君主、僧院長、領主などに象徴されるヨーロッパの旧い封建制度（アンシャン・レジーム）に対して、アメリカ人は旧世界での偏見や生活様式を捨てて、「新しい思想」「新しい制度」に生きる未来志向的な存在として描かれていることに注目したい。すなわち、アメリカは圧政と悪徳、搾取と貧困に呪われたヨーロッパという旧世界の文明にとって代わる新しい可能性としてとらえられている。この一節だけでも「新しい」という形容詞が繰り返し使われていることに注目したい。クレヴクールの「手紙Ⅲ」のなかだけでも「新しい」という形容詞が十七回も使われており、それと同時に「変質」「再生」「復活」といった語もしばしば用いられている。

右に見たように、ヨーロッパからの移民がアメリカという新世界で「新しい人間」として生まれ変わるというレトリックは『アメリカ農夫の手紙』のなかで繰り返し現われる。この「新しい人間」は、旧世界のヨーロッパからの貧しい移民が、新世界のアメリカで土地とパンと保護と地位を手に入れることで生まれると想定されている。クレヴクールは「貧しいヨーロッパからの移民は、無一物の貧乏人として暮らしていた国に対してどのような愛着が持てるでしょうか」との問いを発し、彼らを結びつけている唯一の絆は「その国の言葉を知っていることと、自分と同じように貧しい少数の近親者たちへの愛」だけであるとし、そのような「無一物の貧しい移民に対して土地と、パンと、保護と、地位を与えてくれる」ところがアメリカであると述べている。そして「パンのあるところ、祖国あり」（*Ubi Panis ibi patria*）はすべての移民たちのモットーであると結んでいる。

このナラティヴ（語り）は、一般的にはヨーロッパからの貧しい移民がアメリカに来ることで土地を手に入れ自由土地保有者（フリーホールダー）になることを意味していると考えられるが、それは同時にクレヴクール自身の個人的な経験にもあてはまる。それというのも、クレヴクールの半生をたどってみると、ノルマンディーの貴族の長男として生まれながら、若くして両親と決別し、祖国フランスをあとにしてカナダのフランス植民地に渡り、フランス正規軍の将校としてアブラハム高原の戦いとして知られるイギリス軍との激しい戦闘に加わって自身も負傷して入院している。そのあとニューヨークに渡り、そこでフランス国籍を捨てアメリカ市民となり、名前までイギリス風に変えてアメリカ人女性と結婚し、土地を手に入れて大農場を経営する自由土地保有者（フリーホールダー）として新世界に定住した彼こそ、まさに「新しい人間」として生まれ変わったといえるのではないだろうか。ただし、クレヴクールの場合、ヨーロッパからの移民ではあっても、無一物の貧乏人ではなかったが。

ところで、クレヴクールが謳った「希望としてのアメリカ」、腐敗し疲弊した旧世界から人間が永遠に逃れる機会を持つ地としてのアメリカという神話は、いつごろ、どこで生まれたのだろうか。歴史家のラッセル・ナイはその起源を一八世紀ヨーロッパの啓蒙主義に求めている。

アメリカの独立革命の頃になると、イギリスやフランスの哲学者たちが理想的な合理的社会はどうあるべきかという典型を作り上げており、アメリカは現実に対してその典型を形成し試験する機会を提供したのである。「はじめは全世界がアメリカであった」というロックの言葉は、はじめに作っておくべきであった種類の社会を今や人類がこの汚れを知らぬ新しい環境のなかで、建設できるかもしれないという啓蒙主義者たちの信念を要約している。つまり合衆国は、ヨーロッパでやれなかったことがまだやれるかもしれない場所だと思われたのである[6]。

右のラッセル・ナイの文章からも明らかなように、クレヴクールが描いたアメリカ神話には、一八世紀のヨーロッパ、とりわけクレヴクールの祖国フランスで盛んになった啓蒙主義思想からの強い影響が明らかに読み取れる。さらに、アメリカ移民史研究の碩学ジョン・ハイアムは、独立革命期に見られたアメリカを「人類の新しい門出」と見なそうとする信念は、キリスト教や古典時代のアナロジーに鼓舞されて、至福千年的な意味合いを持つようになったと述べている。その一例として彼は、アメリカを代表する作家の一人とされる『白鯨』の著者ハーマン・メルヴィルが、アメリカに向けて船に乗り込もうとしていたドイツ移民を眺めていたときに抱いた次のような感慨を引用している。

> われわれは国家というよりは世界なのだ。われわれの祖先は、万物の父たる者のなかに没してしまっている。シーザーもアルフレッドも、パウロもルターも、そしてホメロスもシェイクスピアも、ワシントン同様われわれのものである。そして、ワシントンはわれわれのもの同様世界のものなのだ。われわれは全世界の相続人であり、われわれはすべての国民と相続財産を分有しているのだ。この西半球では、全部族、全民族がひとつの統一体へと形を整えつつある。そこにはひとつの未来がある。その日には、離れ離れになっていたアダムの子らが、なつかしいエデンの園の家へ呼び戻されるのが見られるだろう[7]。

第三に、「ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日かこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう」というクレヴクールの言葉から明らかなように、この一つの新しい人種がアメリカという新世界に将来「偉大な変化」をもたらすであろうとの予言がなされている。またここで「融ける」という言葉が使われていることにも注目したい。このクレヴクールの予言は、その後のアメリカが英国の植民地から独立し、やがて二〇世紀の超大国への道を歩むことになることを直感的に見通していたというと言い過ぎになるのだろうか。

第四に、ここでアメリカ人はクレヴクールによって「遠い昔に東方で始まったじつに多くの芸術、学問、活力、勤勉」を持ち運んでくる「西方の巡礼者」と見なされ、さらに「彼らはやがて偉大な円環（サークル）を完成するでしょう」と予測されている。これは「文明は古代ギリシア・ローマからイギリスへ移動し、そして大西洋を渡ってアメリカ大陸へと移り、アメリカ大陸を西に向かって横断し、さらに太平洋を越えてアジア大陸へと地球を一周する」ことで「偉大な円環（サークル）が完成するという文明西漸思想に基づいた見方である。この見方はその後、アメリカが西部へ膨張していくのは、神から白人（アングロサクソン）に与えられた明白な宿命（マニフェスト・デスティニー）であるとするアメリカの西部開拓を支えるイデオロギーになる。このイデオロギーは、西部開拓のためにインディアンを虐殺してその土地を奪い、西部侵略を正当化する標語となっていった。一九世紀末にフロンティアが事実上消滅すると、米西戦争や米墨戦争や米比戦争、ハワイ諸島併合など、合衆国の帝国主義的な領土拡大や、覇権主義を正当化するためのイデオロギーとなった。

第五に、わたしたちはクレヴクールの「勤勉の報酬は、仕事の進み具合と同じ歩調で増えてゆきます」という表現に、アメリカでは労働と勤勉が世俗的な成功によって報われるという「アメリカン・ドリーム」の萌芽を読み取ることができる。

最後に、クレヴクールが強調しているのは、アメリカ人は「新しい原則」に基づいて行動する「新しい人間」であるから、「新しい思想」を抱き、「新しい意見」を持たなければならないとする見解である。その「新しい思想」とは、アメリカの独立革命期にイギリスの経験論哲学者ジョン・ロックやフラ

ンスの啓蒙主義哲学者ジャン・ジャック・ルソーら思い描いた「人類の理想的で合理的な社会はいかにあるべきか」というビジョンに込められた理想に基盤を置くことになることは改めていうまでもない。

4　英領北アメリカ植民地時代の民族構成

英領北アメリカ植民地の民族構成はどこまで多様性に富んでいたのか

ところで、クレヴクールが『手紙』のなかで描いたような民族の多様性は、当時の英領北アメリカ植民地の民族構成に照らしてみたとき、はたしてどこまで実態を正確に反映したものだったのかという疑問が生まれてくる。さらに、彼はヨーロッパからの移民が偉大な育ての母（アルマ・マーテル）の広い膝に抱かれることによってアメリカ人となると述べ、そこでは、さまざまな国から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっており、かれらの労働と子孫はいつの日かこの世界に偉大な変化をもたらすと述べているが、この文面から受ける印象では、ヨーロッパのあらゆる地域からの移民がアメリカという大地に抱かれて――つまり政府などの人為的な移民政策によることなく――ひとりでに新しい人種に生まれ変わると想定されているように解釈されるが、はたしてこれはどこまで歴史的事実だったのだろうか。

一七七六年の独立戦争によって英領北アメリカの植民地がイギリス本国からの独立を果たしたあと、アメリカは毎年のように大量の移民を受け入れ続けることによって、超大国として偉大な発展をとげていくことになる。アメリカ合衆国が二十一世紀の今日にいたるまで経験してきた発展の過程はある方向性に向かって進められたのであり、それは独立に先立つ植民の歴史によって決定されたと考えられるのである。

ヴァージニア植民地の人口はほとんどイギリス系で占められていた

ここで、英領北アメリカの一三植民地のなかでも、最も早く植民地の建設がみられたヴァージニア植民地を取りあげ、そこでの民族構成がいかなるものであったのか、またそれが時間の経過と共にいかに変遷をとげたかをみてみよう。一七世におけるヴァージニア植民地の発展を分析した歴史社会学者のS・ダイアモンドによると、一七世紀初頭からイギリス人以外の人びとが植民地人の一部をなしたことは事実であったが、一七世紀の終わりまでにはヴァージニア植民地の人口構成は、ほとんどすべてイギリス系から成り立つものとなっていた。一六〇七年にヴァージニア会社によってジェームズタウンに永続的な入植地が建設されたのがヴァージニア植民地のはじまりであるが、当初その人口はわずか一〇五名に過ぎなかったし、一六一三年の時点になっても二〇〇名をわずかに上回る程度であった。食糧不足による飢餓や、夏季における高温多湿な自然環境による疫病の蔓延など、初期植民地の過酷な条件が入植者人口の増加をはばんでいたのである。当時のジェームズタウンはかなりコスモポリタンな民族構成になっており、たとえばそこには一八人の囚人がいたことが分かっているが、その民族構成はフランス人一五人、スペイン人一人、イギリス人一人、そして最後の一人がインディアンでかの有名な伝説の人ポカホンタスであった。ちなみにポカホンタスとは、アメリカ先住民ポーハタン族長ポーハタンの娘であり、ヴァージニア植民地建設の指導者の一人ジョン・スミスがポーハタン族に捕らえられたとき助命したといわれる[8]。ヴァージニアの気候にはタバコ栽培が適していることがわかり、一六一六年にタバコの栽培がはじまり、それが輸出換金作物として大きな成功を収めることによって、ヴァージニア植民地はその後急激な人口増加をとげる。その結果、一六一六年にはまだ三五〇人ほどであった植民地人口は、一六五〇年に一万三千人、一六七〇年には四万一千人へと膨れ上がっている。

植民地の生活パターンは根本的にイギリスのものだった

英領北アメリカ植民地の移民たちに早くから類似性が見られたことを強調しているボーンの論文を読むと、とりわけ宗教の面でそれが顕著であり、一七〇〇年には英領北アメリカ植民地の住民のなんと九五％もがプロテスタント教徒で、ローマ・カトリック教徒は数千人に過ぎず、ユダヤ教徒はさらに少なかったのである[9]。さらにボーンは、定住者（セトラー）の出身国を英領北アメリカ植民地全体で見ても、一七〇〇年当時においては、そのおよそ七〇％がイングランド人で、そのほかスコットラ

ンド人、アイルランド人、ウェールズ人が合わせて二〇％、オランダ人が五％、残りがドイツやスウェーデンなどのいくつかのヨーロッパ諸国からの出身者であったと推計している。つまり、ボーンによると、新世界という社会的実験室でさまざまな改革などがなされたにせよ、土地所有や耕作の形態、政治制度と法律制度、娯楽や余暇などにおいて、アメリカ植民地で見られた生活のパターンは、根本的にイギリスのものだったといえる[10]。

アメリカ移民史の研究者ジョン・ハイアムは、アメリカ合衆国の最初の国勢調査がおこなわれた一七九〇年における白人人口のうち、イギリス系人口が占める割合はせいぜい六〇％程度にとどまっていたと見積っている。換言すると、残りの四〇％が非イギリス系人口であったということになる。そして、ニューヨークのオランダ人と同様、独立革命以前のアメリカ一三植民地のイギリス人は、みずからを移民としてではなく、植民地の創設者、定住者（セトラー）、もしくは農民と見なしていたという[11]。このことは、植民地時代の初期にアメリカに入植した定住者（セトラー）と、植民地社会が確立されたあとにアメリカに渡ってきた移民とは概念的に区別されなければならないことを意味する。

移民はアングロサクソン中心の社会への同化を求められた

ヨーロッパから新世界に渡ってきた移民たちは、最初の植民地建設者を除けば、いかに小規模であろうとも、すでに存在していた植民地社会のなかで生活していたのであり、そのホスト社会の基本的性格は圧倒的にイギリス的なものであったと考えられる。すなわち、ヨーロッパからの移民は、クレヴクールの『手紙』で描かれているように、アメリカの大地という〈メルティングポット〉のなかでひとりでにアメリカ人になったわけではなく、植民地時代に確立されたアングロサクソン中心の社会への同化を求められたことはまちがいない。そしてこのことが、植民地の類似性や連帯性をもたらした一つの大きな要因にもなったという事実を強調しておきたい[12]。

クレヴクールは『手紙』のなかでアメリカという〈るつぼ〉のなかで、「あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっている」と高らかに謳っているが、その彼も植民地社会の基本的性格を確立したのはアングロサクソン、すなわちイギリス人であると明言しており、彼らがなしとげたすべてのことに対し敬意を払っていることは、次の文章からも明らかである。

> イングランド人はこの偉大で変化に富む光景の中で、きわめて際立った重要性を示しております。かれらは、ここの十三の植民地に見られる素晴らしい展望のなかで、大きな貢献をしようともしているのです。イングランド人を非難することが時流に合っていることは知っていますが、かれらのなしとげたことに対し、かれらが自分たちの領土を開拓した際の的確さと賢明さに対し、品位のある生活態度に対し、かれらの若年時からの文芸のたしなみとこの半球で最初の古い大学に対し、一介の農夫である私にとって、あらゆるものの価値基準になっているかれらの勤勉に対し、私は敬意を表します[13]。

たしかに初期の英領北アメリカ植民地のコロニーにおいては、クレヴクールの記述にある通り、イギリス人が数のうえでも、その影響力の点でも、圧倒的であったことは否定できない。かれらがイギリスから持ち込んだ政治的・経済的・文化的諸制度がアメリカ社会の基盤となっていることはまちがいない。右に引用したクレヴクールの『手紙』の文面のみを取り出して読むと、クレヴクールはアングロコンフォーミティ論者であるかのように誤解されるかもしれない。しかし、彼の理想としている将来のアメリカのあるべき姿は、決して「イギリスのコピー」になることなどではなかった。次に述べるように、独立革命後のアメリカは急激に民族構成の多様化が進み、イギリス系以外の出自の民族集団が占める構成比が増えていることが国勢調査によって明らかになっている。このように、ヨーロッパの多様な国々からの移民のあいだで異なるエスニック・グループ間の混血が進んだことで〈メルティングポット〉が稼働しはじめたと考えられる。

民族構成の多様性が急激に進んだ独立革命後のアメリカ社会

一七一〇年から一七五〇年にかけて、英領北米植民地には、およそ三十五万人のヨーロッパからの移民が到来している。そのうちの半数は、ドイツ系、スコッツ・アイリッシュ系〔アイルランドのアル

スター地方にはブリテン島から来たスコットランド人移民の末裔、すなわちスコッツ・アイリッシュが多かった。かれらはプロテスタントであったため、カトリックのアイルランド系から区別される）、そしてアイルランド系の移民で占められていた。一八世紀に入りヨーロッパから移民の大波がアメリカ植民地に押し寄せてきたが、これによって一八世紀末のアメリカ社会は、クレヴクールの『手紙』で描かれているように多様な出自のヨーロッパ人からなる〈メルティングポット〉の体を成すにいたった。合衆国で最初の国勢調査が実施されたのは一八世紀末の一七九〇年であるが、それによると、総人口がおよそ三九二万九千人で、そのうち白人総人口は三一七万二千人であり、その出身地域別の構成比を見ると、イングランド系が六〇・九％で依然として多数を占めてはいるが、このほかアイルランド系（九・七％）、スコットランド系（八・三％）、ドイツ系（八・七％）、オランダ系（三・四％）、フランス系（一・七％）、スウェーデン系（〇・七％）となっており、その意味では独立革命後のアメリカ合衆国の民族構成の多様化は急激に進展したということができる。ただし、この〈メルティングポット〉のなかに入って溶けたのは、北欧と西欧からの白人に限られており、アメリカ先住民であるインディアンやアフリカから連れてこられた黒人奴隷はそこから排除されていたことはいうまでもない[14]。

右に見たように、一八世紀末のアメリカ植民地を支配していたのは、白人人口の約六割を占めるイングランド系の人びとであった。しかし、残りの四割を占めていた非イングランド系を含むすべての人びとが、クレヴクールがいうようにうまく溶け合っていたわけではない。オランダ系、スコッツ・アイリッシュ系、ユダヤ系など、それぞれ独自のコミュニティをもっていたのである。しかし、のちに移民排斥の対象となる人びと、すなわち南欧系、東欧系、アジア系（中国系、日系）などはいまだほとんど姿を現わしていなかった。一八世紀アメリカ植民地時代の白人移住者たちにこのような人種的・文化的親近性が見られたことを考慮すると、クレヴクールがアメリカ社会の融合力を強調したことには一定の根拠があったといえる。

5　クレヴクール神話とそのかげり

クレヴクール神話の検証

現代アメリカの歴史家Ｇ・ガーストルは、アメリカ化に関するクレヴクールの楽観論をクレヴクール神話と呼び、この神話の信憑性を、二〇世紀のヨーロッパからアメリカへの移民に関する移民研究者たちによる厖大な研究成果に基づく検証を試みている。結論から先にいえば、かれら移民研究者はクレヴクールのアメリカ神話から一定の距離を置くようになっているという。

ガーストルによれば、クレヴクール神話は次の四つの主張からなる。第一に、ヨーロッパからの移民たちは、アメリカ人になるためにかれらの旧世界の慣習を、みずから進んで捨て去ることを望んだ。第二に、移民たちは自分たちの行く手になんら大きな障害を見出さなかったので、アメリカ化――すなわちアメリカ社会への適応・同化・統合――は迅速かつ容易なものであった。第三に、アメリカ化は移民たちを、時空を超えた一定不変の人種、文化、ないしは民族に融かしてしまった。第四に、移民たちにとってアメリカ化は、隷属、服従、貧困、その他の旧世界の束縛からの解放であった[15]。

しかしながら、二〇世紀初頭の北部工業都市シカゴにおける実証的なエスニシティ・移民研究で大きな業績を残しているロバート・パーク、ウィリアム・トマス、アーネスト・バージェスら初期シカゴ学派の社会学者たちの理論――その詳細な検討はのちの章で改めて試みることになる――には、クレヴクール神話の第二の主張、すなわちヨーロッパからの移民は急速かつ容易にアメリカ人という新しい人種になっていったとする楽観論は見られない。さらに、新来移民の大半は、現実にはアメリカで激しい社会的敵意や労働市場における厳しい競争に直面し、自己防衛のために彼ら自身のエスニック・コミュニティ――すなわちスラム街――に結集したというのが現実であった。このように、移民がアメリカに同化する過程は苦痛に満ちていることが認識され、パークら初期シカゴ学派の社会学者の理論には「解放としてのアメリカ化」という「クレヴクール神話」からの離脱が見られる。

そうはいっても、彼らシカゴ学派の社会学者によるヨーロッパからの新移民の同化に関する実証的調査研究によれば、アメリカへの移住の初期の段階ではヨーロッパからの移民の生活は苦難に満ちていたものの、長期的な視点に立って見れば、移民のアメリカ化は前進的かつ不可逆的な過程で

あり、各移民集団はアメリカ文化を吸収し、ホスト社会の多様なネットワークのなかに吸収されていくことで、次第にその民族的な資質が縮減し、遅くとも第三世代までにはアメリカ社会のメインストリームに統合されることによって、エスニックな集団としては消滅してしまうことが明らかになった。したがって、シカゴ学派の社会学者たちは、移民の同化に関して基本的には楽観的だったというのがガーストルの結論である。この意味では初期シカゴ学派の社会学者たちは、スタインバーグのいうように、基本的にはメルティングポット論者であったということができるだろう。

白人による先住民の搾取

クレヴクールの生涯や著作全体を再読すると、クレヴクール神話として後年批判されることになった「手紙Ⅲ　アメリカ人とは何者か」に見られる手放しのアメリカ賛美は彼の主張の一部であり、その背後にはアメリカの暗部が潜んでいることに彼は気がついていたことがわかる。一例をあげるなら、同じ「手紙Ⅲ」のなかに、クレヴクールがニューイングランドの奥地で目撃したヨーロッパからの無法無頼の連中による先住民に対する悪行の数々に関する記述がある。

> かれら（毛皮交易商人）は先住民と交易しました。品性のもっとも優れた人たちのほかには従事してはならないはずの仕事が、最低の連中に許されているのです。かれらは先住民といっしょに酔っ払い、しょっちゅう先住民を搾取します。上役が見ているわけではありませんから、かれらの貪欲さは、とどまるところを知りません。多少とも知識がまさっているのをよいことに、この交易商人たちは先住民を騙し、時には流血騒ぎも起こします。こうして恐ろしい暴動事件や不意の略奪が起こって、辺境地方にたびかさなる汚点を残し、何百という罪もない人びとが一部少数の人たちの犯罪の犠牲になってきました。一七七四年、先住民がヴァージニア人に対して手斧をとって蜂起したのも、このような悪行の結果です[16]。

さらに「手紙Ⅸ　チャールズタウンの描写」には、奴隷制度がもたらした悲惨な光景の描写が見られる。天然の良港に恵まれたチャールズタウンは交易の中心地であったため、急速な経済発展をとげ、社交界の中心地と呼ばれ、町はいつも陽気な人びとで賑わっていた。ところがその陽気な町で人びとが幸福に暮らしている一方で、黒人奴隷たちは苦役に追い立てる鞭で打たれ、白人のための富を生み出すために汗と涙に濡れた悲惨な日々を送っているという現実があることにクレヴクールは言及している。

> チャールズタウンにおいてはすべてが喜びで、賑わいで、幸福であるというのに、その一方で、悲惨な光景がこの地方一帯に拡がっているなど、ご想像になれますでしょうか。人びとの耳は習慣の力で聞こえなくなり、心は無感覚になっています。すべての富が奴隷たちの苦痛に満ちた労働によって生み出されているというのに、彼らは哀れな奴隷たちの苦悩を見ることも、聞くことも、感じることもしないのです。ここでは奴隷制度の恐怖、絶えざる苦役の苦痛は、目で見られていません。アフリカ人の肉体から日々に滴り落ちて、彼らの耕す土地を濡らしている汗と涙の雨を想って同情してくれる人など一人もいないのです。こうした悲惨な者たちを過度の苦役に追い立てる鞭のうなりは、陽気な首都からあまり遠く離れているために聞こえてきません。選ばれた者たちが食べ、飲み、幸福に暮らしている一方で、不幸な者たちは彼らの生まれ故郷の太陽と同様に、焼けつくように照りつける太陽にまともに身をさらしながら土を掘り起こし、インドアイを栽培し米を脱穀しても、まともな食べ物ももらえず、元気づけてくれる酒のような飲み物も与えられません[17]。

右の引用から明らかなように、クレヴクールはアメリカの植民地におけるアメリカ白人による先住民や黒人奴隷に対する迫害を直接目にしたことで大いに心を痛め、かれらの境遇に深く同情しているが、彼の思い描いた育ての母（アルマ・マーテル）の広い膝に乗せてもらえるのは、ヨーロッパからの白人移民だけであり、先住民であるインディアンやアフリカ系黒人奴隷は、同情されることはあっても、育ての母の慈しみの対象にはなっていない。

むすび

アメリカ国民は重層的集団である

クレヴクールの『手紙』は、その波乱に富んだ彼の人生のなかでは珍しく平穏な日々を過ごしたニューヨークでの農夫体験をもとに綴られている。すなわち英領北アメリカ植民地時代、および独立戦争後のアメリカ合衆国は、若くして根無し草の生活に入ったフランス人青年クレヴクールが、故郷や親類縁者のない不安感から解放され、家族を持ち、自分の農場を手に入れ、日々農耕に従事することで充実した生活を送ることができた。したがって、クレヴクールのアメリカ文明論は、過去を捨て去り新たに自己の居場所を見つけた一人の青年の喜びの声と読むことが妥当であり、それをもって合衆国を象徴する記述として一般化することはできない。

ヨーロッパにおける貧しい人びとが、アメリカの地ではひとかどの人間に生まれ変われるのがアメリカであると繰り返しクレヴクールは『手紙』のなかで述べている。農夫となって土地を開拓し、額に汗して働けば、その労働の果実は自分のものとなり、封建領主や地主、カトリック教会などから取りあげられることもない。皆が節度を保って労働を競い合う、アメリカは自助の美徳の地だと彼は繰り返すのである。しかし、彼の見方がひどく自民族中心的（エスノセントリック）な文明観に彩られていることは否定しようがない。

多文化主義論争の文脈で『手紙』を再読すると、アメリカの国民が実は重層的な集団であることをクレヴクールがさまざまに論じていることに気がつく。たとえば、各植民地にはそれぞれの政治、風習、環境に根ざす独自の特徴があり、この特徴は時とともにますます大きくなっていくと彼が考えていたことが次の文章からも窺うことができる。

> （前略）どの植民地にも政治、気候、農業形態、風習、環境の特殊性に根ざした独自の特徴があります。その大きな力にヨーロッパ人はいつのまにか屈して、数世代もすると、おおむねアメリカ人になるばかりでなく、ペンシルヴェニア人とか、ヴァージニア人とか、そのほかどこかの植民地の名をつけた人間にもなるのです。この大陸を横断する人は誰でも、このようにはっきりしたちがいを容易に目にするにちがいありませんが、このちがいは時と共にますます大きくなっていくものでしょう。カナダ、マサチューセッツ、内陸の植民地、南部の植民地等の住民はそれぞれ気候がちがう分だけ、ちがうようになるでしょう。共通しているのは宗教と言語の点だけです[18]。

このように、クレヴクールは「アメリカ人」という大きなカテゴリーのもとに、多様性を認めていた点にわたしたちはもっと注目すべきであろう。クレヴクールにとって、過去はヨーロッパに存在したのである。アメリカ人に生まれ変わる際にそれは捨て去ることができるものではあったが、エスニシティの名のもとにその残滓はどこかに残る存在でもあった。

メルティングポット論の先駆者としてのクレヴクール

クレヴクールはヨーロッパの諸民族が「育ての母（アルマ・マーテル）」にたとえられたアメリカの大地に抱かれて一つの新しい人種、すなわちアメリカ人に生まれ変わるというレトリックを用いており、この意味では彼はたしかにメルティングポット論の先駆者ということができるだろう。ただし、彼は『手紙』のなかで「融ける」（melt）という語は使っているが、シンボルとしての〈るつぼ〉を意味する〈クルーシブル〉ないし〈メルティングポット〉にあたる英語は一度も使っていない。しかし彼はアメリカを「母なる大地」、すなわち女神にたとえており、その女神の子宮のなかで移民は融けてアメリカ人に生まれ変わることが想定されているのである。つまり、ワーナー・ソラーズのいうように、ここでは女神の子宮が〈るつぼ〉のメタファーとして使われていると考えられる。この意味でアメリカの大地を「育ての母」にたとえるクレヴクールのメタファーは、その後に続く〈メルティングポット〉の先駆ということができる[19]。

アメリカ文学研究者ラッセル・ナイの指摘にあるように、クレヴクールは「アメリカ人とは何か」という大問題と、それに関連する「アメリカ人であることは何を意味するか」という問題をはじめて提起し、さらに、アメリカ生活における中心的で永続的な問題、つまり現実のアメリカと理想のアメリカとのあいだにあるギャップを何とかして埋めるという問題を提起した。最後に、ラッセル・ナイの「クレヴクール論」を引用して本章のむすびとしたい。

クレヴクールの書のなかにはっきりと見られる疑念と信念、信仰と幻滅の結合は、明確にアメリカ的である。清教徒の始祖たちが企てた神聖な共和国をコトン・マザー（引用者注：ニューイングランドの社会的、政治的に影響力のあるピューリタンの作家）が自分の時代のアメリカに実現できなかったように、クレヴクールも啓蒙運動が期待した理性の王国を独立後のアメリカに見いだすことはできなかった。その始まりからアメリカ文学の特色は、『アメリカの農夫からの手紙』のなかにこのように深く感じられる緊張、人類の楽園と希望としてのアメリカという遠大な理想と、その理想を現在のこの場所に現実のものとして実現しようとする根気強い不断の努力とのあいだに見られるこの緊張にあった。クレヴクールの時代と同様、現在においてもこのことはいえるのである。[20]

第１章注

（1）　クレヴクール著／斎藤眞他編集、秋山健他訳『アメリカ農夫の手紙』研究社、一九八二年。

（2）　クレヴクールの生涯については，以下の文献を参照。渡辺利雄「アメリカの夢と現実」、クレヴクール著『アメリカ農夫の手紙』前掲書、五～三十四頁。Thomas Philbrick, *St. John de Crevecoeur*, Twayne Publishers, 1970. Gay Wilson Allen and Roger Asselineau, *St. John de Crèvecoeur: The Life of an American Farmer*, Viking Penguin, 1987.

（3）　クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』前掲書、七七頁。

（4）　同書、八四頁。

（5）　同書、七五～七六頁。

（6）　ラッセル・B・ナイ「クレヴクール『アメリカの農夫からの手紙』」、ヘニグ・コーエン編／大浦暁生・長田光展訳『アメリカ文学の道標』中央大学出版部、一九七二年、四二頁。

（7）　ジョン・ハイアム「アメリカの統合」鈴木重吉・小川晃一編『ハイフン付きアメリカニズム』木鐸社、一九八一年、七二～七三頁。

（8）　Sigmund Diamond, " From Organization to Society, " in L. W. Levine and R. Middlekauff., *The National Temper*, New York, 1968, p. 38.

（9）　Alden T. Vaughan, " Societies Apart: America in the Seventeenth Century" , in S. Coben and L. Ratner, eds., *The Development of an American Culture*, Prentice-Hall Inc., 1970, p. 22.

（10）*Ibid.* pp. 24 - 25.

（11）John Higham, " The Comparative Approach to American History," in C. Vann Woodward, ed., *The Comparative Approach to American History*, Basic Books, 1968, p. 93.

（12）本間長世「アメリカにおける『人種のるつぼ』の神話」東京大学教養学科紀要、一九七一年度、第四巻、三頁。

（13）クレヴクール著『アメリカ農夫の手紙』前掲書、七三頁。

（14）一七九〇年の国勢調査によって明らかになった国民総人口、白人総人口、出身地域別の構成比に関する統計はすべて次の文献に依拠している。U. S. Department of Commerce, *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1970*, Bicentennial Edition, Part 1 and Part 2, 1975.

（15）　Gary Gerstle, " Liberty, Coercion, and the Making of Americans," *The Journal of American History*, September 1997, p. 525.

（16）　クレヴクール、前掲書、八六頁。

（17）　同書、一八〇頁。

（18）　同書、七九頁。

（19）　Werner Sollers, *Beyond Ethnicity: Consent and Descent in American Culture*, Oxford University Press, 1986, p. 77. 同書の著者ソラーズによるメタファーとしての〈メルティングポット〉の考察は秀逸なもので示唆に富んでいる。さらに本章では割愛したが、クレヴクールがアメリカの大地を「育ての母」（アルマ・マーテ

ル）にたとえたアレゴリーをめぐる詳細な記述から学ぶものは多い。

（20）ラッセル・Ｂ・ナイ「クレヴクール『アメリカの農夫からの手紙』」前掲書、五七～五八頁。